

3. 援助交際というコミュニケーション

3-1 「援助交際」のコミュニケーション論的分析

ここでは、援助交際という社会的行為をコミュニケーションという視点から分析することにある。あるコミュニケーションがもたらす効果を考えた場合、行為者が意図した直接的な効果である顕在機能、行為者が意図しない間接的な効果である潜在機能がある。援助交際というコミュニケーション論的分析における顕在機能とは、行為者たちが意図する効果を得ることにある。つまり男性が女性の性的な部分を、金品を代償に自由にするという援助交際を例にとると、端的には男性が女性と性的行為を行い、女性は金銭を受け取るということになる。この顕在的な分析は、「女子高生を買う中年男性」や「援助交際で得たお金でブランド品を買いあさる女子高生」といった援助交際に関するマスメディア報道によく見られるものである。このような分析は、社会的には何らのインプリケーションをもたらさない。社会的には、なぜ中年男性は女子高生を、警察に検挙され社会的地位を失うという危険を冒してまで買ったがるのか、あるいは女子高生が売春してまで金銭やブランド品を手に入れたがるのかという社会的背景や、そのことが起こりうる社会的条件を分析しなければならない。これらの分析の手がかりを与えてくれるのが潜在機能の分析である。

援助交際というコミュニケーション論的分析における潜在機能とは、援助交際において男性、女性たちが彼らの意図した目的以外に何を社会的に得ているのかという問題である。この点に関して援助交際は、男性女性両性に、性的アイデンティティの確立を、男性側にはカウンセリング効果、女性側には演技（ロールプレイ）と男性という社会的・性的存在の認識をもたらしていると考えられる。

しかしながら、何も援助交際はそれを行うことがすべて当事者たちにとってよき効果をもたらすとは限らない。法律的に犯罪と見なされる行為であるがゆえに、当然危険や悪影響もある。それは行為レベルと意識レベルに分けることができる。

私が直接聞いた話では、行為レベルにおいて援助交際という行為によって、たとえば財布を盗まれたり、ヤクザの事務所に連れて行かれたり、レイプされたるといったような危険が常に伴うことが挙げられる。また自我の意識レベルにおいて、「援助交際やっていると、お金の大切さがわからなくなる」や「男性というものが信じられなくなった」、「自分が情けない」といった言葉で表される自己意識への悪影響がある。

3-2 「お金」という語彙

援助交際する女性たちは、一時間や二時間といった短時間で万単位のお金を手に入れることができる援助交際の経済的効率性をよく語る。女性器への男性器の挿入を伴う性交渉である、いわゆる「ウリ」で手に入れることのできる金額の相場は、時給六百円や七百円のバイトを三十時間から五十時間行うことで稼ぐことのできる額に相当する。この事実は、他の仕事やアルバイトという経済的行為と比較して、援助交際のもつ経済的な効率性のよさを示している。「割のいいバイト」や「(援助交際は) おいしいすぎる」という言葉を筆者自身がたびたび耳にしたことから裏付けることができる。

しかしながら、この経済的な効率性だけが援助交際の目的であるかといえば、実はそうではない。一般に援助交際は金品のみが目的であるとマスコミでは語られ、大学教員までもが援助交際を「今の社会そのままの拝金主義」〔伊田 1998 pp. 262〕として論じている。この種の言説に見られる援助交際のとらえ方は事実と反しているし、安易すぎて現実の援助交際という社会問題そのものの抱える諸問題を覆い隠してしまう。確かに筆者が直接聞いた範囲でも、「お金」のみが援助交際の目的であるという発言は、ほぼすべての女性の口から聞くことができた。本当に「お金」だけが目的であり、それ以外のものを援助交際に求めてはいないと語る人もいる。しかし当事者たちがどう意図しようと、ある社会的な行為というものは当事者の意図に反して何かしらの帰結（意図せざる結果）をもたらす。つまり話を聞いていくうちに、「お金」という目的よりも一次的・二次的にせよ、別の動機がその話の中から推測できる場合